

記入日（西暦）2025 年 4 月 22 日

一般社団法人日本医療薬学会 学術委員会委員長 殿

医療薬学学術小委員会 研究活動報告書（最終報告）

1. 小委員会名、研究テーマ

小委員会名	2022 年度医療薬学学術第 3 小委員会
研究テーマ	症例検討による省察の推進と教育への展開を目指した調査研究

2. 小委員会の委員長、構成委員

委員長	フリガナ	ヤノ リョウイチ
	氏 名	矢野 良一
	所属施設の名称 (正式名称)	大阪医科薬科大学 薬学部

構成委員	氏 名	所 属
	荒木 隆一	市立敦賀病院 医療支援部
	板井 進悟	金沢大学附属病院 薬剤部
	上塚 朋子	福井県済生会病院 薬剤部
	長谷川 裕矢	松波総合病院 薬剤部
	間瀬 広樹	国立病院機構長良医療センター 薬剤部
	宮脇 未来	国立病院機構高崎総合医療センター 薬剤部
	矢吹 拓	国立病院機構栃木医療センター 内科

3. 研究の目的

症例検討は自ら経験した症例の省察の場として、あるいは個々の貴重な経験を広く共有する場として、薬剤師にとって効果的な学習・教育の場となり得る。しかし、薬剤師による症例検討は臨床医のそれと比較して、実践され定着しているとは言い難い。すなわち、経験した症例を振り返り学ぶことや教育に活かすことが我が国の薬剤師には根付いていない。この問題を解決するために、薬剤師が症例検討会をどのようなものと認識し、症例検討会に何を期待しているのか、また、実践されている症例検討会はどのようなものなのか、全国的な調査により実態を明らかにし、課題を同定して解決策を提案することが本研究の目的である。

4－1．研究活動の総括

本研究では、医療関連職の教育・研修における症例検討会の位置づけを取り扱った研究の世界的な動向をレビューするとともに、我が国の薬剤師による症例検討会の実態、ならびに症例検討会に対する薬剤師の認識を明らかにするため、日本医療薬学会の会員が所属する医療施設、ならびに会員個人を対象としたアンケート調査、実地調査、インタビュー調査を計画した。

はじめに国内外で医療関連職における症例検討を取り扱った研究論文を網羅的に収集してレビューを行った。その結果、症例検討会を行うことで一定の教育効果が得られること、インタラクティブな形式で症例検討会を開催したほうが教育効果は高いことなどが報告されていた。一方、薬剤師のみならず、医療従事者による症例検討会の実態や効果的な運営方法について検討した研究は乏しいことが明らかとなった。この成果は板井委員が中心となり第33回日本医療薬学会年会(仙台)にて一般演題(ポスター)として発表し(研究業績1)、論文の執筆中である(2025年9月中の論文受理を目指して準備中)。

次に、我が国の病院薬剤部門における症例検討会の実態を明らかにするため、日本医療薬学会の会員が所属する医療施設を対象としてアンケート調査を実施した。アンケートの実施に際し、日本医療薬学会ホームページにアンケートへの協力依頼を掲載するとともに、1691施設に文書でアンケートへの協力依頼を発送した。回答はオンラインで回収した。919件の回答が得られ、データのクリーニングを行った後、最終的に883件(回収率51.9%)の回答を解析した。アンケート回答時点で症例検討会を実施している施設が458件あり、各調査項目で最多となった回答は、開催形態が対面であるのが355件、月1回の開催頻度が180件、1回あたりの所要時間は30分未満が219件、症例検討会の継続期間0～5年が183件などであった。症例検討者の発表者に対して、指導者を配置している施設が209件、発表者に対するフィードバックを実施している施設が244件あった。また、「症例検討会の視点をまとめた資料」や「症例検討会の事例集」の作成を希望する意見が多数あった。この成果は長谷川委員と宮脇委員が中心となり、第34回日本医療薬学会年会(千葉)にて一般演題(ポスター)として発表し(研究業績2)、論文投稿に向けて準備を進めている(2025年9月中の論文受理を目指して準備中)。また、本調査では調査対象を病院薬剤部門に限定したため、薬局の実態や薬剤師個人の症例検討会に対する認識を把握することはできなかった。そこで2025年3月に日本医療薬学会の会員個人を対象としたアンケート調査を設計し、データ収集を終えた。これについては2025年度の年会で解析結果を報告できるよう準備を進めている。

本小委員会の活動成果を踏まえ、第34回日本医療薬学会年会(千葉)にて公募シンポジウム「新コアカリ改訂を踏まえて薬剤師の卒後教育を考える～症例検討会のすすめ～(シンポジウム14)」を開催した。本シンポジウムでは、大学教員、医師、薬局薬剤師、病院薬剤師のそれぞれの立場から実践例や今後の展望を紹介していただくと共に、薬剤師の卒後教育において症例検討をどのように活用するかについて意見交換を行った(研究業績3)。

さらに、施設対象アンケート調査の結果を参考に、3施設を選定し、症例検討会の実地調査と参加者へのインタビュー調査を行った。実地調査・インタビュー調査の成果をもとに、症例検討会事例集の制作を進めており、本報告書にはそのドラフトを添付した(参考資料1)。今後、実地調査で得られた知見と文献レビューで得られて知見から、症例提示のひな型やファシリテーションのコツなど、実際の症例検討会運営や症例

検討会を通じた教育に役立つ情報を資料に追加した上で公表したい。

本委員会の活動全体を総括して、予定した調査については活動期間中に完了したが、得られたデータや事例の整理・解析までは完了させることができなかった。活動期間終了後も継続してこれらを進めることにより、本調査で得られた貴重なデータを活用し、学会発表、学術論文、あるいは事例集などの形で成果物として公表できるよう努めたい。

4－2. 研究業績（学会発表、論文等）

1. 板井進吾、荒木隆一、上塚朋子、長谷川裕矢、間瀬広樹、宮脇未来、矢吹拓、矢野良一. 医療従事者による症例検討会に関するスコーピングレビュー. 第33回日本医療薬学会年会(仙台) 一般演題(ポスター発表).
2. 長谷川裕矢、宮脇未来、板井進悟、荒木隆一、上塚朋子、間瀬広樹、矢吹拓、矢野良一. 本邦の病院薬剤部門における症例検討会の現状. 第34回日本医療薬学会年会(千葉) 一般演題(ポスター発表)
3. 「新コアカリ改訂を踏まえて薬剤師の卒後教育を考える～症例検討会のすすめ～(シンポジウム 14)」。第34回日本医療薬学会年会(千葉) 公募シンポジウム

5. 共同研究、他学会・団体からの支援（COI申告を含む）

特になし

注）提出済みの研究計画書又は研究活動報告書の記載事項から変更がある場合にのみ記載すること。

6. 倫理指針、科学者の行動規範、個人情報保護法等への適合状況（倫理審査等の受審及び承認取得状況を含む）

変更なし

注）前回提出済みの研究計画書又は研究活動報告書の記載事項から変更がある場合にのみ記載すること。